

第四節 ゆり事情

一、大正二年（一九一三）

(一) ゆり根の競争買いのため値が上がり、建値と競争値の二本立てとなった。

(二) 取り引き価格

(建値)

(競争値)

六寸—一銭三厘
七寸—一銭八厘
八寸—四銭六厘
九寸—五銭

三銭五厘
五銭
六銭五厘
八銭

(三) 大里宮元氏が優良品種を発見し、前田植村氏に栽培増殖を依頼したので植村ゆりと命名した。

二、大正三年（一九一四）

(一) 日本ゆりの声価を高め、貿易の基礎を確立し、ますます需要も増大、輸出額も飛躍的に伸びたが、輸出し

たゆりがウイルス病に汚染されているものが多くなったため、一時不評をこうむったことがある。農商務省では大正三年に輸出入植物取締法、ならびに施行規則を公布すると同時に植物検査所を新設し、輸入側の要求事項に基づいて、ゆり根などの検査を行うことになった。その後、産地においては検査や選別が厳重になつた。

(二) ゆり根の競争買い取りがあり、価格も上昇し、島はゆりの好景気でにぎわい沖繩之居やサーカスが来て活気にあふれた。

(三) ゆりの取り引き価格は二本立てとなった。

六寸—一銭五厘
七寸—四銭五厘
八寸—六銭
九寸—七銭五厘
尺以上—九銭

五銭
六銭五厘
八銭五厘
十銭五厘
十三銭

競争買いで値が上がり、好景気となった。

三、大正四年（一九一五）

(一) ゆり積み出しのため和泊港の旧棧橋を改良した。す

なわち現在の古波倉石油から下ってプールと駐車場付近でプールの側突出しているのがそれである。大正

三年から継続工事金二千五百六十円八十一銭（内訳、補助金千六百四十五円八十一銭、村税九百十五円）で着工した。

ゆり取り引き商社、横浜の植木株式会社・新井清太郎商店・田中幸太郎商店・高木商店・ロバートフルトン社・バンテング百番館等が工事費の一部にと寄付をした。名瀬にもコンクリートの棧橋はなかつた時代のこ

(二) ゆりの取り引き価格

五寸—五厘
六寸—一銭
七寸—一銭
八寸—三銭
九寸—四銭
尺以上—五銭

今年から五寸球も出荷されたが、値下がりになつた。

四、大正五年（一九一六）

(一) ゆり取り引き価格の取りきめは、生産者の代表である交渉員が各商社別にゆり根の取り引き価格を交渉していた。

(二) 商社側は、前もって値くずれのないように協議し、

万一不正取り引きをした商社があつた場合は契約金を没収することにしたので、不正取り引きをしなくなつた。

(三) ゆり取り引き価格

五寸— 四厘
六寸— 八厘
七寸—一銭六厘
八寸—一銭五厘

五、大正六年（一九一七）

(一) 和泊小学校首席訓導（後校長）玉江末駒先生が新井清太郎商店の出張員加藤貞直氏に、ゆり根は外国に輸出する大切で特殊な作物であり、輸出も年々伸びているから、商社と生産者が一体となつて生産販売に力を入れた方が良くはないかとの話があり、生産者代表として推薦されたのが皆川の皆川恵三氏（後村長となる）、喜美留の伊地知季道氏、国頭の名島米直氏である。三人とも篤農家で人望があり有力者であつた。この三人を中心に新井組合の手先ができた。現在の集荷責任者の組合である。季道氏は弟の四郎氏を責任者とした。

(二) ゆり取り引き価格

競争買いのため価格は二本立てとなった。

五寸一錢 三錢
六寸一錢 四錢
七寸一錢 六錢
八寸一錢 八錢
九寸一錢 十錢

がゆりの輸入禁止を解除した。
前年度戦争のためゆりが売れずに、栽培を手控えたため生産量が少なく、需要が伸びたにもかかわらず品不足となり競争買いとなった。

(二) ゆりの取り引き価格

五寸一六錢 六寸一二十錢 七寸一二十錢
八寸一二十錢 九寸一二十錢 尺以上一三十錢

ゆり不足のため高価で取り引きされた。

(三) ゆり球根の検査(玉取検査)は各戸別に各家で検査をして、終了するとご馳走を作り、ビールや焼酎を出して検査員の慰労をする習慣があった。和泊の某家でご馳走になり、ビールを飲んで残ったビールを足にかけたのが「ビールで足を洗った」というエピソードのおこりである。

この年は、価格が上昇し景気も良くなったので、「ビールで足を洗った年」といわれている。

(四) 戦後のユリ景気と砂糖の高値で生活も急に向上した。

(五) 喜美留には新井商店・植木会社・多崎商会・鈴木商店など、その手先がおおり、有力者も多かった。生産量

六、大正七年(一九一八)

(一) 第一次世界大戦のため欧米は輸入禁止となる。

植木株式会社だけが三万球買った。

(二) 新井商店の手先が増えた。和字東忠人氏・畦布永吉池治氏・玉城伊井中厚氏が中心になって生産組合ができた。

(三) 植木会社の手先として喜美留の伊地知季蔵氏・和泊の陽兼生氏・陽宏氏を中心に組合ができた。

(四) 他の商社も次々生産組合をつくった。

(五) 第一次世界大戦のためゆりが販売できず、畑に植えのまま放置した人が多かった。

七、大正八年(一九一九)

(一) 第一次世界大戦は大正七年十一月終戦。欧米の国々

も多かったので、喜美留が商人の集合場所であり、取り引きの中心でもあった。
価格も喜美留相場で取り引き価格が決まった。

八寸一九錢 九寸一十三錢

九、大正十年(一九二一)

(一) 市来政敏氏が、余多の元栄川村氏が栽培していた余多黒軸を栽培し、全部リンペンまきにして種子球をつくり、翌年全部、大小をとわず一球一銭で売却したので、一時は一銭ゆりとして世間からもはやされた。

(二) 取り引き価格

六寸以上、和泊では十銭〜十六銭まで暴騰。

十、大正十一年(一九二二)

(一) 新井清太郎商店初代店主は隠居の身でありながら鹿児島県庁に伺い、海外での苦情を説明し、適切な行政指導をとられるように陳情した。また、そのことについて沖永良部の有力者を集めて説明した。常道取り引きを強調し指導されたおかげで品質も良くなり、増産ならびにゆり取り引きの基礎が築かれた。が、おしくも七月七日和泊の伊集院旅館(現在のシーサイドホテル敷地にあった。)において六十一歳で急死された。

(二) ゆり取り引き価格

(三) 取り引き価格

五寸一錢 六寸一五錢 七寸一七錢

各社とも相当な損害をこうむった。

(二) 新井清太郎商店出張員藤田定雄氏が初めて来島した。氏は非常にゆりに熱心で五十余年間もゆりの栽培ならびに取り引きについて指導啓発され、栽培者から藤田先生として尊敬された。昭和五十二年に永良部百合生産出荷組合から、昭和五十五年には和泊町町制施行四十周年記念式で功労者として表彰された。藤田氏が残された功績は大きい。

六寸―八錢 七 寸―十六錢 八寸―三十二錢
九寸―四十錢 尺以上―六十錢
立山買い二十錢から四十錢

十一、大正十二年（一九二二）

(一) 当時は商人の直接現金買い取りで、現金は横浜から持参して来た。式拾円札が高額札であった。

(二) 金融機関としては郵便局だけであった。

和泊郵便局は貯金取扱高の実績が全国でも優秀だったので逓信省から表彰を受けた。これもゆり代金のおかげである。

(三) ゆり取り引き価格

五寸以上、平均八錢。知名村は十錢であった。

十二、大正十三年（一九二四）

(一) 新井清太郎商店店員藤田定雄氏がえらぶゆりの種子を持って行き、沖縄県読谷山村を中心に栽培を奨励した。百七十万球の生産があった。品種はアング種であった。

(二) 横浜植木会社も沖縄でゆり栽培を始めた。

(三) 沖縄ではそれまで、宮古ゆりを栽培していた。

(四) 田皆全黒軸ゆりは茎丈高く茎・花に紫色が着色するので商品価値が低く後廃止になった。最盛期には、百万球ぐらい生産されていた。

(五) ゆり根取り引き価格

五寸―三錢 六寸―五錢 七 寸―七錢

八寸―九錢 九寸―十一錢 尺以上―十三錢

十三、大正十四年（一九二五）

(一) ゆり根取り引き価格

五寸―三錢 六寸―五錢 七 寸―七錢

八寸―九錢 九寸―十一錢 尺以上―十三錢

十四、大正十五年〓昭和元年（一九二六）

(一) ゆり根取り引き価格

五寸―四錢 六寸―六錢 七 寸―八錢

八寸―十錢 九寸―十二錢 尺以上―十四錢